

カフカとブロート（Ⅱ）

河中正彦

第五章 プラハのブレンターノ学派

19世紀末のオーストリア・ハンガリー帝国において文学者たちに絶大な影響力を持った二人の思想家がいた。エルンスト・マッハとフランツ・ブレンターノである。前者は主にウィーンで、後者は特にプラハで強い影響力を持っていた。マッハの『感覚の分析』は、「現実の世界と感覚された世界との見かけだけの対立」は、「自我を実在する統一」とみなすから生じるのであって、「自我を要素のより強く連関しあったグループ」とみなせば、「この種の問題は現れない。¹⁾」と説き、ヘルマン・バールに激しい衝撃を与えた。バールは、「自我とは、その内部で結び合わされる諸要素の名でしかない。……自我は救いがたい。²⁾」と絶望的に述べている。『言語批判論』の著者、フリッツ・マウトナーは、マッハが彼に与えた影響について、「オーギュスト・コントのように、形而上学の言葉を忌み嫌うことなく、心理学的に記述し、それゆえ説明するマッハの認識論的な実証主義は、私の下意識に後々まで影響をのこした。³⁾」として、言語批判論の着想に強い影響を与えた他の三人の思想家、ビスマルク、オットー・ルートヴィヒ、ニーチェと並べて、彼の名を挙げている。さらにホーフマンスタールは、1897年の夏学期にマッハの講義「普遍的な問題について」を聴講し⁴⁾、ローベルト・ムーヅルにいたっては、マッハについての論文で、博士号を取得している⁵⁾。さらにロシアでは、ボグダーノフ、ルナチャルスキー、レニン（『唯物論と経験批判論』、1909）がマッハに取り組んでいる。『ウィーン精神』の著者によれば、オーストリアの哲学者で、マッハほど多くの分野に影響を残した人は、「フランツ・ブレンターノとフッサール、そしておそらくオットー・ノイラートなどがそれに近いだろう。⁶⁾」

忘れ去られたノイラートはここでは置くとして、ブレンターノとフッサールは師弟関係にあるから、つまるところブレンターノが、マッハと対抗できる唯一の思想家ということになる。彼こそ20世紀の知の地殻変動を用意した数人の巨人の一人だと言えよう。ブレンターノは、ドイツのコーブレンツ近郊の生ま

れで、詩人のクレメンス・ブレンターノはおじに、ベッティーナ・フォン・アルニムはおばにあたる名門の出である。

ブレンターノの影響は、彼が自分の著作を出し渋る人だったことも与かって、充分には評価されていない。「この流派の精神的財産はたいてい講義から、または書簡や会話から、さらに広い範囲ではただの噂から生じているにすぎない。⁷⁾」とウーティッツは述べている。彼の講義を聴講したのは、単に現象学の創始者エドムント・フッサール、対象論のアレクシス・マイノングなどのブレンターノ派だけではなく、ジークムント・フロイトやチェコの大統領トマーシュ・マサリクにまで及んでいる。フロイトの伝記作家アーネスト・ジョーンズによれば、フロイトは1875年の夏学期のブレンターノのアリストテレス論理学の講義を、さらに翌年夏にも週三時間のアリストテレス講義を聴講したばかりでなく、ブレンターノの推薦で、急死した訳者の代わりに J.St. ミルの著作集の第12巻の翻訳を廻してもらっている⁸⁾。

ブレンターノはプラハには住まなかった。しかしブレンターノの弟子たち、カール・シュトゥンプ、ゲシュタルト心理学の創始者クリスティアン・エーレンフェルス、言語哲学のアントン・マルティ、オスカー・クラウスやアルフレート・カスティルらは、プラハ大学で次々と教鞭をとったのである。カフカにとっては、エーレンフェルスとマルティが重要で、1901年の冬学期にはエーレンフェルスの「実践哲学」を、1902年の夏学期には彼の「音楽劇の美学」とマルティの「記述心理学の根本問題」を聴講している⁹⁾。カフカやプロートの知的環境において、特に哲学思想的には、どこを向いてもブレンターノ学派と触れあわずには済まなかった。

マルティの講義は、ウーティッツによれば、「12時から1時まで、ゆっくりと小声で、修辭的修飾を一切とっばらい、見事な教育学的手腕でなされた。¹⁰⁾」しかしプロートの評価はまったく別で、マルティの「哲学史」の講義は無気力なものとして描かれている。ブレンターノ学派では、アリストテレス、ロック、ベンサム、ライプニッツは重んじられるのに対し、プラトン、カント、アインシュタインは禁句になっていた。マルティは毎年同じノートを朗読したので、すでに販売されたトラの巻があって、カントの下りになると「私たち派これからカントの『純粹理性批判』にかかるわけだが、これは本来は『純粹非理性批判』と呼ばれるべきものだ。」と必ず一つ覚えのジョークを飛ばした。トラの巻のその箇所には（笑い）という注があって、聴講生たちは「指示通りに」やんやの喝采を浴びせた¹¹⁾。カフカが受講した「記述心理学の根本問題」は、し

かしテーマをしぼった特殊なものだから、もっと深く問題に立ち入ったものだったにちがいない。フーゴー・ベルクマンの回想によれば、カフカは「記述心理学と発生的心理学」の講義をベルクマンとともに受講し、試験に備えたが、カフカは試験に受からなかった、という。しかしヴァーゲンバッハは大学の修了証明書にマルティの「記述心理学の根本問題」三単位をリストアップしているから、試験を通ったにちがいない¹¹⁾ - a。

記述心理学は、カフカの場合けっして小さな問題ではなかった。なぜなら1917年10月の断章が示すように、カフカは常に記述心理学に批判的でありながら、しかしそこから逃れることが容易ではなかったからである。

私の自己認識は、たとえば私の部屋の認識に比べて、なんと貧弱なのだろう。なぜだろうか。外部世界の観察があるようには、内部世界の観察はないからである。(少なくとも記述)心理学は、その全体が或る擬人化であり、境界を蚕食することだ。(内部世界は生きられるのみで、記述されることはできない。) —心理学は、地上が天の平面に映っているのを記述することだ、あるいはより正確に言えば、地上のものをたらふく吸い込んだ私たちが、映っているものと思いこんでいる鏡像を記述しているにすぎない。というのも鏡像はぜんぜんありえないし、私たちがどこを向こうと、私たちは地上を見ているにすぎないからだ¹²⁾。」

〔()内は、「批判版」では原稿から抹消されている。〕

ペーター・バイケンが的確に指摘しているように、カフカにおいてはブレンターノとフロイトの、二つの心理学が問題になっており、カフカが単に「心理学」というとき、それは常に記述心理学を指している¹³⁾。とすれば、チューラウで成立したアフォリズムの多くは記述心理学の批判に当てられていることになる。ヴォルフガング・ビンダーは、『フランツ・カフカにおけるモチーフと形象化』でブレンターノのカフカへの影響を完全に否定している¹⁴⁾。確かにビンダーの主張するとおり、ブレンターノのカフカへの影響を立証しようとしたヴァーゲンバッハの比較は、けっして実証的に十分な説得力をもつものではない¹⁵⁾。しかしヴァーゲンバッハの比較点を批判しただけでは、ブレンターノ学派のカフカへの影響を否定し尽くしたことにはならないだろう。ここではこれ以上この問題に深入りすることはできないが、「最後に心理学!¹⁶⁾」というカフカの忌々しげにも、悲痛にも聞こえる叫びからも明らかのように、記述心理

学が、自己観察への嫌悪とあいまって、カフカ文学に大きな影を投じていることだけは疑いえない。

カフカがエーレンフェルスの講義を二度も聴講したのは、たぶん彼の講義が学生たちのあいだで、非常な人気があったからである。彼は極めてシャープな感性の持ち主であったばかりでなく、伝統的な授業方法を無視して、講義後も学生たちと歓談した。彼は多才で、作曲家、劇作家、優生学者、倫理学者、宇宙論の研究者を一身に兼ねていた。エーレンフェルスを一挙に有名にしたのは「ゲシュタルト質について」(1890)である。マッハの「感覚の分析」のゲシュタルトの考え方(空間形態・音響形態)とブレンターノの志向性を結合したこの論文は、ヴェーアトハイマー、ケーラー、コフカに受け継がれ、ゲシュタルト心理学の礎石のひとつとなった。ゲシュタルトを志向する精神は、実際に知覚される個々の要素に形態質を賦与するが、この質は個々の部分より実在度の高いもので、このようにして与えられる「全体」は部分の総和以上のものである。なぜなら個々の部分をいちいち列挙できなくても、全体を思い浮かべることではできるのである¹⁷⁾。影響とまで言えるかどうかは別として、この思想は、カフカに全体と部分に関する思考を促したように見える。「ぼくはもう断片では聞きたくない。初めから終わりまで全部話してくれ。それ以下なら聞きたくはない。けれど全体にならウズウズするぐらいだよ。¹⁸⁾」カフカの「ある闘いの記録」にはこんな一節がある。ここでは「全体」に特権的な価値が与えられ、部分と全体の関係は、全体あつての部分というところまで転倒されている。

カフカのエーレンフェルスに対する関係は、ほとんど晩年に近い1918年までたどることができる。1901-2年の受講のあとも、カフカはエーレンフェルスの姿を1912年2月4日の「日記」に書き留めている。「滑稽な情景。ますます美しくなっていくエーレンフェルス教授。彼の禿頭はライトが当たると、上の方に向かって息で膨らましたような輪郭が際だっている。そろえた両手を押しつけ合い、集会にたいする信頼のあまり微笑みながら、楽器が転調したときのように豊かな声で混血人種を支持している。¹⁹⁾」カフカはここでかつての師エーレンフェルスを戯画化しているが、けっして軽蔑してはいない。エーレンフェルスは、工業化による人類の劣等化を癒す万能薬として、モンゴル民族やイスラム教徒にならって、一夫多妻制の導入と離婚の承認を主張する『性道徳』(1907)を書いた人種改良論者であった。ジョンストンは彼を「人種主義者」として描いているが、それと「混血人種の支持」とはなじまないように見え

る²⁰⁾。ジョンストンの記述からは矛盾でしかないこの二つは、エーレンフェルスのより善い理解者であったブロートの記述ではけっして矛盾しない。エーレンフェルスは自分の息子ロルフをイスラム教徒に改宗させるほど、黄色人種の生殖上の優位性を確信していた²¹⁾。彼の人種改良論はナチ風にアーリア人種の純血主義を説くのではなく、人種の混血をむしろ支持するものであった。また一夫多妻制といっても、多くの妻と子供を持てるのは、ほんの一部の選ばれた男達であったが、その選抜がどのようにして選ばれるのかを明示できなかった。選良とその他を選別する優生学は、当然ながら物議をかもし、帝国のある大学では「彼を首にしろ」と、学生の排斥運動が起きた。そのさなかで彼は騒ぎにさらに油を注ぐような発言をした。自分の先祖にユダヤ人がいて、彼はそれを誇りにしている、というのである²²⁾。このようにエーレンフェルスは人種改良論者だとしても、決して反ユダヤ主義者ではなかった。彼の改良論は人種的なものではなく、汎人類的なものであって、その原理は徹底した水準主義であった。

エーレンフェルスが彼の改良論を戯曲化した「星の花嫁」は、1912年3月23日にプラハの新ドイツ劇場で初演され、大成功であった。ブロートは好意的な批評を書き、エーレンフェルスに大変感謝されている²³⁾。カフカはその上演を訪れ、翌日の日記に短い感想を残している。「粗雑でこみいった筋書きに直面して、ほんやりと見入っていたが、三組の知人の夫婦を目の当たりにして我に帰った。劇中の病気の将校。健康と決断を義務づけられた、ピンと張った軍服を着た病んだ身体。²⁴⁾」カフカはどうやら作品にそれほど惹かれなかったもようである。さらに1913年10月21日と28日にはエーレンフェルスのゼミナールに出席している²⁵⁾。カフカの出席は、ブロートとフェーリクス・ヴェルチの共著『直感と概念—概念形成のシステムの根本特徴』（1913）がゼミの討論のテキストに用いられたからで²⁶⁾、いわば付き合いである。この時もカフカはそれほど興味を持てなかったようで、フェリスに宛てた手紙で「昨日私はゼミナールである娘さんを一時間じっと見つめていました。彼女があなたに少し似ていたので。²⁷⁾」と書いている。

そして最後にカフカはブロートがエーレンフェルスに言及したことに深い印象を受け、エーレンフェルスの『宇宙生成論』（1916）をブロートに貸してくれるように頼んでいる²⁸⁾。カフカのエーレンフェルスに対する関係が、マルティンに対するそれよりも長く続いたのは、ブロートがエーレンフェルスと個人的な関係を後々まで保持していたからだろう。エーレンフェルスは貴族の出身で、

プラハのベルヴェデーレに、町全体を眺め渡すことのできる古くて美しい邸宅を構えていて、ブロートは第一次大戦中によくそこを訪れた。「スレートで葺いた小さな塔のある邸宅はおもちゃ箱から飛び出てきたように見えたが、この山の手の家には、静けさとはいわないまでも、思慮の深さが備わっていた。エーレンフェルスの所に来ると、彼は不安な夢から覚まさればかりのような印象を与えた。彼は妨害者を暖かく迎えて、人のいい笑みを浮かべていた。その深いヴィブラートのかかったバスの声と一体となっていた、彼の並々ならぬ暖かさは、いつでも自然でありながら、なにか不意打ちを与えるところがあった。²⁹⁾」カフカはわざわざブロートにエーレンフェルスの本を借りた位だから、『宇宙生成論』を読んだと思われるが、感想を残していない。カフカが暮らしていたころのプラハの状況は、このようにブレンターノ学派の雰囲気に浸されたものであった。

第六章 カフェー・ルーブル事件

ブロートがこの事件について初めて語ったのは、カフカがガルトとして登場する彼の小説「愛の魔法の国」(1928)³⁰⁾においてである。ブロートはここでこの事件をフィクションを交えてではあるが、彼らの関係の重要な転換点として形象化している。しかしドキュメントとして初めて語ったのは、彼自身そう述べているように、「指針の人カフカ」(1951)³¹⁾であった。後にブロートは「論争の生涯」(1960)³²⁾においても一度もっとも詳細に語ることになる。事件のあらましはこうである。

プラハのブレンターノ主義者達は、フェルディナンド街12番地のカフェー「ルーブル」に隔週に一度集まって議論を戦わせていた³³⁾。級友のフーゴー・ベルクマン、エーミール・ウーティッツ、オスカー・ポラックなどに導かれて、カフカはこのサークルに1902年に接近していった³⁴⁾。ブロートとフェーリクス・ヴェルチがこの会に参加しはじめるのは、翌年のことであり、エーミール・ウーティッツはさらに翌年1904年に参加し始める³⁵⁾。この会には、ブレンターノはもとより、アントン・マルティも会合にはあまり出席せず、もっぱらマルティの弟子、オスカー・クラウスとアルフレート・カスティルがそれを取り仕切っていた³⁶⁾。会の雰囲気は、空文句を忌み嫌う点では厳格で、どのような概念にたいしても、その起源が経験のなかにあることを立証しなければならなかった³⁷⁾。ここにはブレンターノがイギリス経験論から受けた影響が色濃く影をお

としている。クラウドとカスティルはブレンターノを崇拜するあまり、師の教えから逸脱する思想には、大審問官の態度で臨んだ³⁸⁾。こんな不寛容なサークルになぜカフカやブロートが関わる気になったのかがそもそも不思議なことに思えるかもしれないが、すでに述べたように当時のプラハではブレンターノ学派が一元的に支配していたから、選択の余地はなかった。また他方でブロートに「ここでは純粋な真理の探究に一切が捧げられている³⁹⁾」という感情を抱かせたほど真剣なこの会合は、若者たちにとって極めて大きな魅力であったことも確かである。

ブロートは会のこのような雰囲気を感じてか、入会をためらっていた。というのもブロートはショーペンハウアーに最も熱い共感をいただき、けっしてブレンターノ主義者ではなかったからである。彼はそのことを重々ことわってから入会している。ブロートの動機は、大学のマルティエの講義だけでは、ブレンターノの教えが十分に理解できないので、「しかるべき真剣さで」彼の哲学を学びたい、ということであった。それはそれで了承され、入会は認められた⁴⁰⁾。ブロートはしかしブレンターノの哲学には最初からかなりの違和感を抱いていたようである。ショーペンハウアーの哲学にひとたび魅せられたものは、ブレンターノ哲学のようにペシミズムの影の薄い哲学に夢中になれるはずがない。そのうえ師の教えから逸脱する思想には宗教的な不寛容さで非難されるばかりでなく、「知的・性格的な欠陥がある⁴¹⁾」という烙印をおされるとあっては、居心地の良からうはずはない。最若年のブロートは生意気な若造に見えたにちがいない。彼は「この小さなアカデミーの偶像に敬意を欠いた言葉を吐いたばかりでなく、それを印刷させた⁴²⁾」のである。その文章は、1905年10月7日の『現代』誌に掲載された「魂の双子の兄弟」というたった2ページの短編である⁴³⁾。その根本にある考えはこうである。

「世界の悪と苦痛を説明する、それどころか正当化するのには、不幸な人間にはだれにでも、彼の双子の魂のうちで優遇された他方、幸福な方が別にいて、そいつが邪魔をし、本来彼に差し向けられるはずの幸福を途中でかすめ取っているのだ、という考えである。誰もそのような分身を持っているにちがいない、……一方は快樂を、他方は苦痛をなめ尽くすが、そのわけは一方がこの世で他方に会うことはなく、埋め合わせができないからだ。もし不幸な方が、幸福な分身に出会えたら、対立は均されるかもしれないのに。⁴⁴⁾」

一見たわいもない幻想のように見えるが、世界の悪をどう説明するか、また対立する二項はなぜ容易には解消されえないか、といった問題を含むものであっ

た。トレドの修道院に住む「私」は、ますます深く不幸に陥っていき、音楽家である幼友達（＝双子の兄弟）ユリウスに、になにもかも奪われた、美しさも、妻も、健康も、地位も……と考え、自殺する。同じ日に双子のうちの「幸福な方」も死んでしまう。彼の机には、「魂の双子の兄弟は、個体化の原理、マーヤのヴェールを見破って、死において一つになった」というメモが見つかる⁴⁵⁾。この話がなぜブレンターノの信者達の怒りを買ったかは、これだけでは解らない。彼らの忌憚に触れたのは、テキストのなかのある一節だった。

ブロートはそれら二人の登場人物のうちのどちらもブロート自身ではない、と一応は断っている。ところで彼は「幸福な方」ユリウスに、その「合理的で冷め切った此岸的人間」としての性格付けの手段として、「君も知っての通り、ぼくは反心靈主義者で、そのうえブレンターノの信奉者だ。だから万人に慈悲深い神を信じて、形而上学全体を妄想、あるいは精々曖昧なものだと考えている。ぼくは常軌を逸したものと妥協したことはないのだ。⁴⁶⁾」と語らせているのだ。しかしこれがブロート自身の見解でなく、作品中の人物のそれだとしても、あまりに粗雑にすぎた。これではニーチェを「いかさま師」と呼んだのと同断である。

これこそ事件を巻き起こした一節であった。この背後には、講壇哲学の慈悲深い神への楽観的な信仰に対する、ショーペンハウアーのペシミズムからの誹謗が潜んでいる。今日ならたとえ患者の性格付けのためにせよ、こうも不作法には書かないだろう、とブロートは述べている⁴⁷⁾。しかしブロートのブレンターノ観自体がけっして正確でも、正当でもないところを含んでいる。というのもブレンターノは、幼いときから司祭になるべく教育を受けていて、1873年4月11日までは実際に司祭であった。その身分を捨て、教会からも離脱するきっかけとなったのは、ローマ教皇ピウス9世の教皇不可謬説にたいする、ブレンターノの反対運動である。これが契機となって、彼の信仰は揺らぎ始める⁴⁸⁾。

だが一般にはブレンターノの神観はカトリックの伝統から切れていないと批判されていた⁴⁹⁾。だからカール・シュトゥンプは、カスティルが編纂した『遺稿集』に、古い講義草案「神の現存について」が収録されていることを非難している⁵⁰⁾。シュトゥンプによれば、ブレンターノは有神論の高い倫理的価値ゆえに理神論から離れ難かったのは確かだが、晩年にはスピノザを想わせる汎心論的な立場に移っていた。ブロートのブレンターノに対する非難は一般に流布した見解のコピーでしかなかった。ブロートの書いた問題の一節は、けっして作品の人物の性格付けにとどまるものではなく、ブロートのブレンターノ観を

そのままに露にしたものであった。

ブロートがカフェと一緒のカフェ「ルーブル」の特別室にはいると、一同が厳粛な顔つきで集まっていた。出たばかりの『現代』が一部机のうえに置かれていた。論難と追求の口火を切ったのは、なんと級友エーミール・ウーティッツであった。ブロートはこの告発の動機を、ウーティッツが並みいる教授連に媚びを売って、あわよくば私講師の職を手に入れようとしたのだと、解釈している。(実際ウーティッツは後にハレ大学の講師になる。)ブロートは、それが彼自身の見解ではなく、登場人物の見解だと抗弁したが、無駄であった。さらに彼は、ブレンターノに特別な敬意を払う義務はない、自分はむしろ反対派としてこのサークルに加入したので、ブレンターノの教えを「しかるべき真剣さ」で学ぶだけだ、とまで発言している。ウーティッツは、ブレンターノをからかっておいて、しかるべき真剣さもないだろう、と応酬する。さらに長い論争が闘わされ、そのうえさらに学生の懲戒裁判のような審議が重ねられ、大もめとなった。だれもブロートの味方も弁護もしてくれなかった⁵¹⁾。しかし突然だれかがブロートの脇に立った。それがカフカであった。それまで黙っていた彼が、沈黙を破って「二人で出ていった方がいい。ブレンターノのサークルをこれっきり見捨てよう」と、ブロートにささやいたのである。ブロートは『指針の人カフカ』で「私たちの友情はまだそれほど期間を経ていなかったもので、お互いの実を示す機会に恵まれていなかった。それだけよけいに彼の援助は感動的だった⁵²⁾」と述べている。二人はこうして共同で陰気な尋問にけりをつけたのである。その後フェーリクス・ヴェルチも、ブロートとの連帯を表明して脱会した。

ブロートは後日書面で正式に除名を告知される。その内容は、ブロートは公式のカフェ「ルーブル」の学問的なサークルからは除名されるが、しかし同時にファンタ家での講演の夕べには出席してかまわないし、ルーブル・サークルのあらゆる会員との私的な交際を続けることは差し支えない、というものであった。ブロートはこの申し入れを断って、自分を分割するわけにはいかないと返事している。そして不思議なことに、若い三人の会員の脱会后、カフェ「ルーブル」の会合そのものが消滅してしまったらしい⁵³⁾。

この事件はブロートにとって「この世の終わり」とまで感じられた体験であった⁵⁴⁾。「ブレンターノ主義者のサークルから放り出された苦痛に私は何年も苦しんだものである、しかしそれは私にとって幸せの泉ともなった⁵⁵⁾」とブロートは総括する。なぜならその事件を通じて、カフカとヴェルチというふたりの真の友人の愛が確証されたからだ⁵⁶⁾。事件は友人を飾にかける。そしてカフカ

とブロートとの交友史においてこの事件が持つ意味は極めて大きいと言わねばならない。ブロートが率直に告白しているとおおり、カフカのブロートにたいする捨て身の加担は、二人の関係における最初の同盟関係であった。カフカとブロートの友情が完成するには、なおブロートの親友ボイムルの死を待たねばならないとしても、カフカのこの加担なしには、彼らの関係は、現にそうであったのとは、また別の姿をとったにちがいがなかった。

ところでブロートへの除名通知に現れる「ファンタ家での講演の夕べ」とは、公式なルーブル・サークルに対して、もっと私的で気の置けない集会であった。ルーブル・サークルに先行し、それと平行して、最初は緩やかな連続講演のかたちで始まったこの非公式な夕べは、サークルの消滅後は、プラハのブレンターノ主義者たちの唯一の集まりになった。ベルタ・ファンタ夫人は、プラハの旧市街の広場グローサー・リングに面した薬局「一角獣」の女主人で、薬剤師の主人マックス・ファンタは、イスラム教の信奉者であった。彼女はプラハの世紀末の「スタール夫人」ともいうべき存在で、知識人のサークルを身の回りに集めていた。彼女は、妹のイーダ・フロイントとともにプラハ大学の最初の女子学生の一人であり、哲学に心からの関心をを寄せたこの才媛は、文学や哲学、自分の旅行などについて各所で講演し、会合を定期的に自分の家でも開いて、ルーブル・サークルの謂わば支所ともなっていた⁵⁷⁾。それがすでに述べたように、母屋にとってかわるのである。

ファンタ家では、正統派ブレンターノ主義のカフェー「ルーブル」では禁句になっていたプラトン、カントや相対性理論も取り上げられ、和やかな雰囲気であったようだ。⁵⁸⁾ この会がどのような消長をたどったかは、詳しいところまでは解っていない。確実な足がかりになるデータは、カフカをルーブルのサークルに誘った一人であるフーゴー・ベルクマンが、博士号を取得した際に、ルドヴィッヒ・ブッセの『精神と肉体、心と体』をこのサークルの友人たちから贈られているが、その日付は1905年12月18日となっており、表題紙には、「私たちがともにした努力の思い出に」という書き込みの後に贈り主の名が署名されている。それらの名は、ベルタ・ファンタ、マックス・レーデラー博士、エーミール・ウーティッツ、オスカー・ポラック、イーダ・フロイント、レオーポルト・ポラック、フランツ・カフカである⁵⁹⁾。この時期は、ブロートがルーブルのサークルを去った直後であるから、ここに名のないのは当然として、カフカの名はあって、ヴェルチの名がないのはどういうわけだろうか。他の人の名は、上下一列に並んでいるのに、カフカの名は脇に離れて書いてあるという。

脱会したカフカは幾分の後ろめたさを感じながら、ベルクマンへの友情から多分遅ればせに後で加えてもらったのではなかろうか。この署名者たちの名は、事件の生々しさを語っているように思われる。

ベルクマンはファンタ夫人の娘エルゼと結婚している⁶⁰⁾。だからベルクマンにとって、ブロートと同盟して、サークルと手を切るのは困難であっただろう。ブロートは脱会の数年後ヴェルチがブロートとベルクマンの仲を取り持ち、仲直りさせたと述べている。ベルタ・ファンタ夫人は、例の侮辱を忘れてほしいと、ブロートに手紙で詫び、ウーティッツをも巻き込んだ和解が成立した⁶¹⁾。ビンダーそれを1908年頃と推定している。フーゴー・ベルクマンの指導のもとに、ヴェルチの活発な協力もあって、片や哲学の古典の輪読を続けながら、他方有名な知識人を呼んで講演してもらうというスタイルが確立された。古典は、カントの『将来の形而上学のための序説』と『純粹理性批判』、フィヒテの『学問論』、最後にヘーゲルの『精神現象学』を一ページごとに読むでは、討論するというものであった⁶²⁾。ヴァーゲンバッハは、カフカがこの会に「常に」参加したとしているが⁶³⁾、ビンダーはこれを証明しがたい推定にすぎないと反論している⁶⁴⁾。カフカがこの古典の輪読会にどの程度出席したかは、今となつては知る由もないが、講演のほうはその幾つかを確かに聴いている。ファンタ家で催された講演は、ルドルフ・シュタイナーの神智学、当時プラハ大学で教えていたアルベルト・アインシュタインの相対性理論、数学者ゲルハルト・コヴァレフスキーの群論（カントールの超限数）、物理学者フィリップ・フランクの相対運動、同じく物理学者フロイントリッヒのプランクの量子論、ホップ教授の相対性理論と精神分析の講演など、実に多彩で先端的なトピックが話題になっていた⁶⁵⁾。このうちカフカが確実に聴いたのは、シュタイナーと相対性理論に関するいずれかの講演である。

シュタイナーに関しては、『日記』に詳しい記述がある⁶⁶⁾。相対性理論については、晩年の『日記』に、自分は少年の頃性については無関心で、現在相対性理論にかんしてそうであるのと同様に、無理強いされなければ無知のままに終わったであろう、といった記述がみられる⁶⁷⁾。この記述から推察されるのは、カフカがトピックな学問的課題にさして内面からの関心を抱けなかったということだろうか。カフカは1914年2月6日のブロート宛の手紙で、ファンタ家の夕べへの参加を断っている。「あすファンタ家にはまず行かないだろう、ぼくはあそこにあまり行きたくない。⁶⁸⁾」カフカがこの時はじめてこんなことをブロートに打ち明けたとしたら、それは逆にそれまでの関与が小さくなかったと

いうことを証しているかもしれない。カフカがもう一度この会に第一次世界大戦中に出席したことが、ネリー・エンゲルによって証言されている。プラハの郊外にあるシャルカの谷の別荘地ポドゥババにフゴー・ベルクマンが住んでいて、ファンタ家のサークルは、ここで集会を開いたことが、時としてあったらしい⁶⁶⁾。ファンタ家の夕べは、アインシュタインがモーツァルトのヴァイオリンソナタをブロートのピアノ伴奏で弾いたというエピソードが示すように⁶⁷⁾、くだけた楽しいものだったから、リゴリズムに凝り固まったルーブルでの集会とは違って長命であった。

この章の最初に述べたように、ブロートは彼の小説『愛の魔法の国』(1928)でカフェー「ルーブル」事件についてすでに書いている。しかしここでは事件の場所を、カフェーではなく、ブレンターノの倫理学のゼミナールでのこととしている。彼の倫理学は、クリストフ・ルードルフ・ノヴィ(=マックス・ブロート)、リヒアルト・ガルタ(=フランツ・カフカ)、ゲスターターク(=エーミール・ウーティッツ)の三人には、「あまりに素朴で、醒めすぎている」ように見える。学生が交代ですることになっている小さな発表を、あるときクリストフが行うと、ゲスタータークは「先週リヒアルト・ガルタが同じテーマをさらに深く細心に扱った。クリストフのレポートはガルタの盗作に、しかも全く誤解した模倣にすぎない。」と批判する⁶⁸⁾。ゲスタータークはガルタに跪拝していて、お先棒を担いでいる。彼はクリストフを批判することで、ガルタとの間を裂こうとしている。ゲスタータークはガルタが身振りで制するのにますます激昂して、カフェー(ここでは店の名は挙げてないが、これがルーブルに相当する)でのクリストフのブレンターノ批判(これが『現代』誌での揶揄に該当する)まで持ち出してクリストフを攻撃する。教授(マルティに該当)は、「あなたは実際にそんなことをおっしゃったのですか」とたずねる。ガルタは否定するように目混ぜをするが、クリストフはすべてを認めてしまう。クリストフは恥をかいて退出せざるをえなかった⁶⁹⁾。

ここではガルタがクリストフとともに退席したとはなっていないし、『現代』誌も登場しない。ウーティッツのプライヴァシーを顧慮して、事実とは大幅に改変が施されている。『指針の人カフカ』(1951)でもウーティッツの名は伏せて、「ある若い男が」としか書かれていない⁷⁰⁾。しかしブロートのウーティッツに対する怨念は深く、彼の時流におもねる傾向を容赦なく暴きたてている。『プラハ・サークル』でブロートはウーティッツを「適応の巨匠」と呼び、ブ

ラハでのブレンターノの有神論から、ドイツの大学でのその時々 of イデオロギーに組みした時期を経て、ついには Kommunismus の無神論にいたる節操のなさを批判している。もしこれらの変わりざまが政治権力の力関係にぴったりと平行に動いているにすぎないなら、巧みなおべっか使いの嫌疑をまったく払いのけるわけにはいかないと⁷⁴⁾。ブロートの批判は不当とはいえないだろう。

しかしブロートがカフカの最初期の短編の登場人物をウーティッツがモデルだ断定するとき、それは同じくらい正当だろうか。ブロートは、1902年7月20日のオスカー・ポラックへの手紙の「恥ずかしがり屋のノッポと彼の心の不正直な男」⁷⁵⁾なる作品の「不正直な男」のモデルは彼だと断定している⁷⁶⁾。しかしカフェー「ルーブル」事件の三年前であるこの時点で、カフカは勿論、ブロート自身だってまだウーティッツがどんな人間か予感もしていなかっただろう。その時点でウーティッツをモデルにすることは、困難である。ゲルハルト・クルツが正当にも指摘しているとおおり、「彼の心の不正直な男」は「恥ずかしがり屋のノッポ」に依存した関係、つまり「彼の心の」は「ノッポの心の」としか読めない⁷⁷⁾。つまり二人はそれぞれカフカの心の両極を暗示する人物で、二人ともカフカの心の具象化である。そこにはモデルなど問題にならないというわけだ。クルツはブロートのこの指摘を「信じられない」と斥けている⁷⁸⁾。ブロートは『愛の魔法の国』のようなモデル小説をたくさん書いたので、作品の人物にいちいちモデルを探したくなるのかもしれないが、カフカの場合多くは自分がモデルである。このモデル問題は、ブロートのウーティッツへの怨念の深さ以外にはなにも語っていないように思われる。カフェー「ルーブル」事件のブロートに与えた心の傷はそれだけ深かったということだろう。

文献 註と略号

- 1) Mach, Ernst: Analyse der Empfindungen. Gustav Fischer, 1922⁴ S.22-3 (Nachdruck von > Wissenschaftliche Gesellschaft < 1991).
- 2) Bahr, Hermann: Dialog vom Tragischen. S. Fischer. 1904. S.79-101. Hier zitiert nach > Wiener Moderne-Literatur, Kunst und Musik zwischen 1890 und 1910 <. Reklam 7742. S.148
- 3) Mauthner, Fritz: Prager Jugendjahre-Erinnerungen. S. Fischer. 1969. S.200

- 4) Hofmannsthal, Hugo/Beer-Hofmann, Richard : Briefwechsel. S.Fischer 1972 S.226
- 5) Musil, Robert : Beitrag zur Beurteilung der Lehren Machs. Rowohlt. 1980.
- 6) Johnston, William M. : Österreichische Kultur- und und Geistesgeschichte. Gesellschaft und Ideen im Donauraum 1848 bis 1938. Bölau, 1974. S.195 (以下、**Johnston: ÖKG**と略記)
- 7) Utitz, Emil : Erinnerungen an Franz Brentano. Wissenschaftliche Zeitschrift der Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg. Geistes- und Sprachwissenschaft. Jg.4, H.1 (1954) S.73-90. S.74.
- 8) Neesen, Peter : Vom Louvrezirkel zum Prozeß-Franz Kafka und die Psychologie Franz Brenntanos. A. Kümmerle. 1972. S.32-3.
- 9) Wagenbach : Franz Kafka. Eine Biographie seiner Jugend. 1883-1912. Francke 1958. S.107, 243 (以下、**Wagenbach: FK**と略記)
- 10) Utitz, Emil : Erinnerungen an Franz Brentano. S.73
- 11) Brod, Max : Streitbares Leben. Autobiographie 1884-1968. Insel. 1979. S. 165. (以下、**Brod: StL**と略記)
- 11-a) Bergmann, Hugo : Erinnerungen an Franz Kafka. Universitas. Zeitschrift für Wissenschaft, Kunst und literatur 27, Heft 7. 1972. S.739-750.
Hier S.745.(=**Bergmann: EFK**). Wagenbach: FK. S.243
- 12) Kafka, Franz : Nachgelassene Schriften und Fragmente II (Kritische Ausgabe) Fischer. 1992 S.31-2(以下、**NSF II**と略記)
- 13) Beicken, P.; Franz Kafka-Eine kritische Einführung in die Forschung. Athenäum. 1974. S.201.
- 14) Binder, Wolfgang : Motiv und Gestaltung bei Franz Kafka. Bouvier, 1966. S.85
- 15) Wagenbach : FK. S.112-114.
- 16) NSF II S.81. und S.134 (Nr.93)
- 17) Neesen, Peter : Vom Louvrezirkel zum Prozeß. Franz Kafka und die Psychologie Franz Brentanos.(=**Neesen: LP**) Kümmerle 1972. S.124-131. Johnston : ÖKG. S.304-310.
- 18) Kafka, Franz : Beschreibung eines Kampfes. Die zwei Fassungen.

- Fischer, 1969. S.41.
- 19) Kafka, Franz : Tagebücher. (Kritische Ausgabe) Fischer. 1990. S.370.
(=Kafka: T.)
 - 20) Johnston : ÖKG. S.309<...und verfiel so jener Anbetung der Mutter-
schaft, die der Rassismus allgemein nach sich zu ziehen pflegt.>
 - 21) Brod : StL. S.211-12
 - 22) Brod : StL. S.211 und Johnston: ÖKG. S.308
 - 23) Brod : StL. S.214
 - 24) Kafka : T. S.412
 - 25) Kafka : T. S.587. und Kafka: rief an Felice. Fischer, 1967. (=Kafka:
F) S.468. Siehe auch Franz Kafka/Max Brod: *Eine Freundschaft-
Briefwechsel*. (=KBB) Fischer 1989. S.133 und 474.
 - 26) Brod : StL. S.164. 210, Kafka: T. Kommentarband S.146.
 - 27) Kafka : F. S.468.
 - 28) KBB. S.251
 - 29) Brod : StL. S.212.
 - 30) Brod, Max : Zauberreich der Liebe. Paul Zsolnay, 1928. (=Brod:ZL)
S.68ff.
 - 31) Brod, Max : Franz Kafka als wegweisende Gestalt. (= Brod:KWG)
Tschudy, 1951. S.32-7
 - 32) Brod : StL. S.167-176
 - 33) Brod : KWG. S.33 Brod : StL. S.164 Kafka-Handbuch (Hg.H.Binder)
Bd.1.(=KHB-I) Kröner, 1979. S.286 Wagenbach: FK. S.107ではカフェー・
「ルーブル」は20番地になっている。
 - 34) Brod : StL. S.169. Neesen: LP. S.27
 - 35) Brod : StL. S.169, Wagenbach: FK. S.108, KHB-I S.286-7
 - 36) Brod : StL. S.168
 - 37) Utiz, Emil : Erinnerungen an Franz Brentano. in < Wissenschaftliche
Zeitschrift der Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg > Jg.4, H.1.
S.73-90. (=Utiz:EFB) hier S.73
 - 38) Utiz : EFB. S.74
 - 39) Brod : StL. S.167
 - 40) Brod : StL. S.167

- 41) Utiz : EFB. S.74
- 42) Brod : KWG. S.34
- 43) Brod : StL. S.163-4
- 44) Brod : StL. S.172-3
- 45) Brod : StL. S.174
- 46) Brod : StL. S.174
- 47) Brod : StL. S.165-6, 174
- 48) Johnston : ÖKG. S.294
- 49) Utiz : EFB. S.84
- 50) Utiz : EFB. S.84
- 51) Brod : StL. S.175
- 52) Brod : KWG. S.35
- 53) Brod : StL. S.177
- 54) Brod : StL. S.176
- 55) Brod : KWG. S.37
- 56) Brod : StL. S.176
- 57) Wagenbach : FK. S.108
- 58) Brod : StL. S.172
- 59) Bergmann : EFK. S.745
- 60) KH-I S.288
- 61) Brod : StL. S.176-7
- 62) Brod : StL. S.171, KH-I S.288
- 63) Wagenbach : FK. S.174
- 64) KH-I S.288
- 65) Wagenbach : FK. S.174
- 66) Kafka : T. S.30-35, S.159
- 67) Kafka : T. S.916
- 68) KH-I S.289
- 69) Brod : StL. S.48, KH-I S.289
- 70) Brod : StL. S.171
- 71) Brod : ZL S.69
- 72) Brod : ZL S.70-71
- 73) Brod : KWG. S.34

- 74) Brod, Max : Der Pragerkreis. Kohlhammer, 1966. S.192
- 75) Kafka : Briefe 1902-1924. Fischer, 1958. S.14-6
- 76) Brod : StL. S.166
- 77) Kurz, Gerhard : Schnörkel und Schleier und Warzen. Die Briefe Kafkas an Oskar Pollak und seine literarische Anfänge. in>Der junge Kafka< Hg. v. Gerhard Kurz. (Suhrkamp Tb. 2035 1984) S.68-101. hier S.88-9 (=Kurz: SSW)
- 78) Kurz : SSW. S.101

〔「カフカとブロート」(I)は、山口大学・工学部研究報告・第48巻・第1号に掲載。〕